

---

# 天使の名をもつ悪魔な弟子

薄明

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使の名をもつ悪魔な弟子

### 【Zコード】

Z9486U

### 【作者名】

薄明

### 【あらすじ】

森にたまたま落ちていた薬材ハーブは生きた子供だった。魔女の弟子となつた子供はやがて魔術師となり、師匠である魔女にまじないをかけた。

弟子の黒い思惑を、果たして魔女は見破ることが出来るのか……。

日の光も届かない、鬱蒼とした木々の生い茂る森の奥深く。

ときおり不気味な獣の声が響き渡る以外は耳が痛くなるほどの静寂に包まれ、あまりの空気の濃さに息苦しささえ覚える薄闇の中。

ひとり大きな老木があった。

樹皮の剥がれかかった幹は、まるで血らもがき苦しんだかのように曲がり、救いを求めるように天へと枝を伸ばしている。しかし折れた枝先に救いは見えず、まるで絶望の内に枯れ果てたかのような老木の側に、魔女ロミルダの家はあった。

\*\*\*

ロミルダの一日は午後から始まる。

まず朝食兼昼食が済むと、弟子のミハエルが入れたお茶を飲みながら、居間に何冊も積み重ねてある魔術書を手に取る。夕食を食べ終わると再び夜遅くまで魔術書を読み解き、朝も白々しくなる頃やつとベッドに潜り込むと、昼近くまで惰眠を貪る。そしてまた朝食兼昼食を食べ、弟子のミハエルが入れたお茶を飲みながら……と、

ここ何年もこのような自堕落な生活を繰り返していた。

しかし、その日は朝から（午後から）何かが違っていた。  
まずお茶の味。これはてつきりミハエルが町で買い物をしたついでに、新しい茶葉を買って来たのだと思つた。

そして現在。

ロミルダは自らの手足を見下ろすと、灰色の光沢ある毛並みに目

を瞬いていた。

「「」や？」

先程よりも、常識を逸脱するほどずんぐりと丸みを帯びた指に意識を向けると、半透明の鋭利な爪がにゅうとのぞく。背後を振り返ると、すらりとした長い尻尾がゆつたりと左右に揺れている。

視界も低い。見覚えのある天井がやけに高く感じる。

記憶に残るこの感覚は久しづびりであったが、ロミルダは慌てるこのなく周囲を見渡し、足音もなく床を駆けると、勢いをつけてトンとチエストの上に飛び移った。

感覚は鈍っていない。どうやら間違いはなさそうだ。

そう思いながらも、ゆっくりと鏡の前に移動すると白らの姿に目を細めた。

そこには、どこからどう見ても猫であった。

長くない灰色の毛のすらりとした体つきの美人猫だ。毛並みは艶やかで、ちょっとした身体の動きによって光の加減だらうか。銀色にも輝き、緑の瞳には知性を宿している。

まだ若い。とても三百歳の猫には見えない。

だが、どこからどう見ても自分である。

通常ならきっと受け入れがたい姿であつただろうが、意外と冷静でござられたのは、稀に魔術で白らこの姿をとることがあつたからだ。

それにも。

ぴくりと耳を動かす。

今回は白らが望んでなつた姿ではない。

と言つことは、おそらくこれは呪いの一種だらう。にやーん、と唸りつつ、これがどういう種類の呪いなのか白らの魔力を練つてみる。呪いをかけた相手に反せるものなら反してやる

のだが、一度身に受けたものだ。そう簡単にはいかないだろ？。

だが、しばらくして「にやつー？」と驚きの声を上げると、思わず両手で頭を抱えてしまつた。実際には顔を洗つていのうつな姿で。魔力が練れない。

つまり、力を封じられてしまつていて。

しかもこの呪いには見覚えのある魔力が加わつていて。見覚え、というよりも知り尽くしている魔力だ。

何の冗談だ、と思つてゐるところに、小さな音がして隣室の扉が開いた。

「ロミルダ様？」

そつと名を呼び、顔をのぞかせた青年の青い瞳がゆっくりと部屋の中をさまよつと、すぐにチエストの上にいるロミルダを見つける。視線が合つと扉を大きく開き、彼はまっすぐこちらにやつてきた。その顔に驚きはない。

『どうこいつもりだ』

実際、「にやーにやーにやーにやー」などとこつこつこつこつしか聞こえなかつただろ？が、曲がりなりにも魔女の弟子だ。動物の言葉を理解することぐらい朝飯前でなくては困る。

ミハエルは綺麗な顔を緊張したよつて強張らせてると、じつとこちらを見つめてきた。

「私が呪いをかけたことには気づいてらっしゃるのですね

当然の質問に肯定の意味を込めて尻尾を揺らす。おそらく、あの味のおかしかつたお茶に何か仕込んだのだろう。

『私がおまえの魔力に気づかぬはずがないだろ？』『これは何の冗談だ？』

田の端で感情の動き共に鬱がピクリと動く。ここまで強力な呪いは決して冗談ではないのだろ？

鋭く見据えると、ミハエルは視線を逸らしながらも、しつかりと頷いた。

「ええ。ずっとあなたに思い知らせてやるひつと想つていたのです」

物騒な物言いに、ロミルダはスッと田を細めた。

だが、内心では非常に焦つていた。思い当たる節が多くて。表面上はいかにも何事でもないよう冷静さを装つてじつと黙つていたが、実際にはどの件だろ？とめまぐるしく考え込んでいたのだが、伸ばされてきた手に気づくのが遅れ、咄嗟に避けることが出来なかつた。

「こやつ！？」

魔力を使つて逃れようと両手を正面に伸ばしたが、日頃から頼つてばかりいた魔力はあいにく封じ込められている。あつけないほど簡単にまるで自ら抱っこをせがんだかのようにミハエルの手に捕らえられてしまい、宙ぶらりんの手足をばたつかす。

『離さんか！』というか、びつじて呪いをかけたのか理由が分からぬ。説明しろ…』

「……本当に分からないのですか？」

少し傷ついた表情を浮かべた青年に、わずかながら罪悪感がわき、思わず手足の動きを止めていた。これでもミハエルがまだロミルダ

の背の半分の頃から世話をしているのだ。多少の情と喧嘩のものはあ  
る。

『……実を言つて思ひ当たる』ことが多すぎて、どれだか分からん』

後ひめたく思ひつつも正直に告げるべ、ミハエルはそんなことだ  
るかと思つました、と言ひ深々と溜息をついた。

どうやらお見通しだつたらしく。

それなのにロミルダを腕に丁寧に抱え直すと、先程までロミルダ  
が座つていた椅子に腰を下ろした。

ミハエルに膝の上に下ろされたロミルダは、不安定な場所に爪を  
出さないよう苦労しながら座り直すと弟子を見上げる。すると、逆  
に弟子の青い瞳が見下ろしてくる。それが心もち冷たいと思つてし  
まつたのはロミルダの氣のせいだらうか。

「では、あなたが思ひついたものを言つてみて下せよ」

まるで立場逆転な弟子の質問に、それでもロミルダは律儀に「  
いやあ」と鳴いた。

『ん？ うへん、やうだな。まずはアレじやないのか？』

そう言つて、過去を遡り一つ一つ、これはどうだ？ と尋ねるこ  
とにした。

ミハエルをこの森で見つけた時、最初はミイラが落ちてこいるのか  
と思つた。

ミイラは不老長寿の薬にもなると言われている貴重な薬材だ。ま  
さか行商人が落として行つたのか、と思ひつつ、つまづきしながら

近づくと、それは瘦せ細つた鶏がらのような身体にすたぼろの衣服を身につけた子供だった。足は裸足で、その上ほとんど意識もない状態。

薬材でない死体に用は無い。

本当は放置していても良かつたのだが、死体の片付けのことを思うと憂鬱になり、それならば怪我を治してやつてさつたと森から追い出そうと考え直した。

だが看病してやつた間、ミハエルは何を考えていたのか、怪我が治ると弟子にしてくれと言つてきたのだ。

最初は断つたが、あまりのしつこいや、熱意に負け、自ら逃げ出すような嫌な仕事をわざと押しつけたものだ。

とは言つても、あからさまに嫌がらせをするのもどうかと思い、取りあえず薬の材料集めからさせることにした。

魔女の薬材とは世に言つゲテモノばかりだ。

とかげの尻尾やゴキブリの翅、果てはムカデの足、そつ言えばミニズを一晩で百匹集めてこいといふのも言つたことがある。絶壁の岩場にしか生えない苔を取つて来いといふのもあった。人間を好んで食べるという人魚が住む湖にしか生えない水草を取りに行かせたこともあつた気がする。

部屋の片付けも苦手で料理もしないロミルダに、いつの間にかミハエルは家の事を言わなくともやるようになつていて。薬の材料もいつの間にか揃つていて。そこまでされでは、さすがに魔術の方も教えないわけにはいかなかつた。しかもミハエルには魔術の素質もあつたようで、教えることをどんどん吸収していつて最早教えることなどなくなり、立派な魔術師に育つたといつのこと。

話しながらどんどん愚痴つぽくなつていく。

こんな立派な弟子に育つてくれて師匠として嬉しく思つ反面、立派になりすぎて立つ瀬がないではないか。その上、なぜか弟子に恨まれて呪いまでかけられるなど。

ぐちぐちと思う存分話し終えると、思いのほか心の中がすつきり

した。

だからロミルダが話す間中、黙つて優しい手つきで背中を撫でていたミハエルを振り仰ぐと、率直に疑問をぶつけていた。

『で、結局何が不満なんだ?』

そう言つたのだろう。

何か不満があるから まあ、弟子に呪いをかけられる師匠というのも問題はあるのだろうが こんなことをしてしまったのだろう。追い詰めた原因は、師匠であるロミルダにあるのだ。責任をもつて解決してやるつもりは、まあ ある。

「私の不満が何かも分からぬのに……まして、魔力も封じてあるのに解決できるのですか?」

どこか挑発的な台詞に、じりりと弟子を睨みつける。

馬鹿にするな。確かに師匠としては至らないところもあるが、弟子のことは分かつてているつもりだ。

ミハエルは何事においても用意周到なところがある。ロミルダを猫にしたのも、何か思惑があつてのことだろう。魔力を封じた、ということは魔女の力を必要としないのだ。  
そこまで考えてハタと気づく。

『おまえは猫が飼いたかったのか?』

まさかと思いつつ尋ねた。

このような奥深い森には危険がたくさんある。普通の猫は一度迷子になつてしまつたら帰つてこられないだろう。だからなのか……。そう言えば昔、猫になつたロミルダを妙に賞賛していた事を思い出す。

しかし。

「 ちなみにロミルダ様にかけた呪いですが、一日一度、人の姿に戻るうと思つたら戻れますよ?」

もちろん私はいつでもあなたを人間に戻せますけど、と厭味つたらしく付け加えてくる。

思わずムツとして、その場で元の姿に戻つてやる。当然、そこはミハエルの膝の上で、遠慮なくどしづと座つてやつた。

「 せつせと言え! 馬鹿者が!」

胸倉をつかみ上げ睨みつけると、わずかに顔を赤くしたミハエルが視線をすいつと横に逸らした。

「 ロミルダ様。この体勢はちょっと……」

「 なんだ、文句があるのか?」

「 いえ。ありません」

むしろ光榮ですと呴かれ、ミハエルの考えがますます分からなくなる。

「 で? どうしてこのよつな呪いを私にかけたんだ? せつせと解け!」

服をつかんだまま軽く揺さぶる。

人間に戻れたのはいいが、魔力の方はからつきし駄目だった。これは呪いを解かなければ魔力は戻りそうにない。

「 本当に思いつかないのでですか?」

胸倉をつかむロミルダの手をそつと押せば、ミハエルは寂しそうに首を傾げた。その青い瞳が、まっすぐにロミルダの瞳をのぞきこむ。澄んだ瞳が何を訴えているのか、彼の瞳の中に書いた自身の顔は情けないことに完全に旗色が悪く、理解出来ていないうことをそりしている。

その上、ロミルダを[写]した瞳の持ち主にまで完全に晒されてしまつた。

……そんな捨て犬のような瞳をされると、何か悪いことをしたような気分になるではないか。

「う……す、すまん。本当に分からん」

どうやら猫を飼いたいと言つのも違つたらしく。

うなだれるロミルダの頬に躊躇いがちに手を伸ばしたミハエルは、頬にかかる灰色の髪を耳にかける。

「先日、あなたはもう独り立ちをしろと言いました」「ああ、言つたな」

言いながら、まだ記憶に新しい出来事を思い出す。もう教えることは何もない。おまえならどこに行つてもやつていけるだらうと確かに言つた。

「私はあなたの側にずっといたいのです」「だがそれだと弟子のままだぞ?」「構いません」

きつぱりと言い切つたミハエルに首を傾げる。

側にいたいのならば、なぜ呪いをかける必要があるのだろう。

「では、そう言えれば良かつたではないか」

「それは……そうなのですが、弟子でいいのですが、弟子では嫌なのです」

「なんだ、それは」

わけが分からず眉間に皺を寄せる。

するとミハエルは、色々と諦めたように話しだした。

「……実は、この呪いをかける為にどうするのが一番いいのか考えたのです」

ミハエルが話しだした内容に、ロミルダは師匠として、そしてこの呪いを解く手がありがあるかもしづないと密かに期待しながら耳を傾けた。

彼が言つことには、まず魔力を封じるだけにしようと思つたらしい。しかしそれだと普通の人間として過ごすだけで、ロミルダはミハエルの手を必要としない。

ロミルダとしては魔力がないからこそ、家事をしてくれる者が必要だつたのだが、ミハエルはそう思わなかつたようだ。

続けてミハエルは、ロミルダにもつと自分が必要として欲しかつたので、ロミルダの偽りの姿で彼の最も好きな猫の姿にしたのだと言つた。猫の姿だと、ご飯を作ることもできないでしょう、と。微妙にずれているその発想をどう受け止めていいものか、しばし悩む。

「もつとこを使つて欲しかつたのか?」

つまり遠まわしに、弟子である以上もつと仕事をするから追い出さないで欲しいと言つていいのだろうか。

だが、そう言つ意味で必要とされたいなら馬鹿げたことだ。ロミルダは十分この弟子には満足しているのだから。

「いえ、そうではありません。……つまり、あなたに今まで以上に私という存在を必要として欲しかつたのです」

「今まで以上？」

思わず、うーん、と考え込んでしまった。

独り立ちしると言つたが、あれは言つた後、実は後悔したのだ。ロミルダの生活に、ミハエルはあまりにも深く係わり過ぎてゐる。喉が渴いたと思うと飲みものが出てくるし、ほんの少しの間つたた寝をしただけでも気づいたら上着がかけてある。

そんな至れり尽くせりで気が回る者は、ミハエルぐらいのものだらう。他に代わりはない。

実際、今以上に必要としると言われても困るのだ。

ロミルダは自らの出した結論に納得して顔を上げると、フツと笑う。田の前に立つミハエルと田が合つて、一瞬、青い瞳の中に期待が覗く。

そう、これは、可愛い弟子を思いやつてのことなのだ。  
だから、きつぱりと辞退の言葉を口にする。

「いや、それは遠慮するべし

当然のように告げると、ミハエルの瞳がなぜだか暗い色を帯びた。

「どうしてですか？」

「私は今まで十分だぞ？」

これ以上、弟子に迷惑をかけるつもりはない。一応、これでも気兼ねはしているのだ。

しかし、ミハエルはゆっくつと頭を横に振った。

「……私はそのようなことを言つていいのではありません。ただ

」

そう言つて、ロミルダの両頬を押さえると正面から瞳を覗き込む。

「ただ あなたの全てが欲しいのです。食べてしまいたいほどに

……

告げられた内容を、再び頭の中で吟味する。

「食べると呪いが解ける前に死んでしまつぞ？」

「その食べるではありませんが……まあそうですね。そういう呪いがお好みなら、かけ直すのもやぶさかではありません」

「……」と笑つて告げられ、その笑みに寒氣を感じて首に手をやる。何か違つたのか？

ロミルダは再び考え込む。

食べたい、と言つのは額面どおりの意味ではないのか。確かに食べなければ猫ではなく、鶏とか豚にする方が確實に美味しいだろう。結局、ミハエルは何が言いたいのだ？

そう思いながらも頬に添えられた手がやけに熱くてロミルダの思考の邪魔をする。

だが、その熱が何かをロミルダに訴えかける。

それが頭に一つの答えを浮かび上がらす。

いや、まさか、と思いつつ。

目の前の男をそつと窺い、その瞳の中に見つけた欲情に、血の気が失せる。

まさか、食べるところのは

ロミルダは知らないうちに、なんだか非常に苦手な方向に話が進んでいたことに気づく。

しかもこの体勢はなんだ。これはかなりマズイのではないだろうか。

落ち着きなく視線をさまよわすと、取りあえず逃げる」とにする。ポンッと猫の姿に戻り、素早くミハエルの膝の上から飛び降りた。だがすぐに気づく。この部屋の扉は内開き。つまり把手を回し、その上引かなければ開くことはできない。

しかもその把手は現在はるか上方……。

確かにミハエルは人の姿に戻れるのは一日一回と言っていたではないか。先程本日分は消費した。つまり……。

ゆつくつと近づく影に、ひやりとしたものが背筋を駆けのぼる。総毛立つとはまさにこのこと。

その後、ロミルダが白旗を上げることとなつたのは、悪魔な弟子が囁いた、たつた一言だったとか。

“どうせ食べられないてしまつなり、今だらうと先だらうと一緒に

しゃうへ。

(後書き)

またまたつゝこみじいの満載ですが、一応コメティイです。無謀にもコメティイです！

よくある設定、よくある展開、よくある結末。取りあえず無難に書いてみました。まあ、短編の練習だと思つてやって下さい。

ちなみにミハエルの名前はミカエルのドイツ語名です。タイトルにしておきながら作中では触れなかつた……。

気が向くと続きを書くかもしれません……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9486u/>

---

天使の名をもつ悪魔な弟子

2011年8月8日13時04分発行